福島大学附属図書館報

書燈

No.47 2011.10.1 発行

〒960－1293　福島市金谷川1番地
TEL（024）548－8087
http：//www.lib.fukushima-u.ac.jp/
携帯電話版
http：//www.lib.fukushima-u.ac.jp/i.htm
福島大学附属図書館

電子図書館への期待と「本」への愛着

人間発達文化学類　昼田源四郎

わたしの本来の分野である医学領域では、基礎・臨床を問わず各ジャンルの専門誌の電子化が急速に進んでいる。電子ジャーナルは、自分の机上のパソコンからキーワード検索するだけで、世界中の最新論文を読むことができるので有難い。一方、わたしは古代から近世までの、日本人の「闇の心性史」とでもいうべき道楽的な研究もしている。そのため古典文学も重要な「史料」だが、膨大な書籍数なので広大な砂浜から数個の真珠を探し出そうとするような、時間と根気のいる作業である。自宅にある『日本随筆集成』（吉川弘文館）ですら全巻で100冊ちかくもあるので、ほとんど絶望的な気持ちになる。「研究資料」として使うには電子書籍が便利であり、各出版社の電子書籍への動きや国立国会図書館で進められている電子図書館事業に大いに期待している。

しかし、既存の「本」にも愛着があり、ぜひ生き残ってほしい。この大震災で自宅の書庫も散乱し、この機会に思いきって本を整理し捨てようかと思ったが、日がたつにつれ決心がにぶり、捨てられないまま廊下に山積となっていて、家庭争議の「本」となっている。この中には若いとき毎週1夜、中央大の木田ゼミで読んだハイデガーの著書や講義録などが10冊以上もあり、いずれも開くといろいろ書き込みがしてあって、当時の楽しかったゼミの想い出がよみがえり、捨てるのに躊躇する。メルロ・ポンティも好きだが、ハイデガーや道元は何度でも読み返したい本であり、これはマーカーで線を引いたり、鉛筆やボールペンで書き込みをしたりしながら読まないと理解できない（しても理解できない）ので、これは紙媒体の本の良さである。

本屋をうろつくのも楽しい。幸い、私が住む街には、大型書店が2軒ある。どちらかの書店に月に1度は行き、最新の医学雑誌のコーナーをチェックしたうえで、あとは目的もなくうろつく。そこで、たいがい4～5冊を買い、隣接する喫茶室でコーヒーを飲みながら、ぱらぱらと目を通すというのが私のささやかな楽しみである。落語の名人CDシリーズも隔週の発売日直後に行かないと売り切れることがあるので、これも気が抜けない。

古書店めぐりも楽しいが、古書店がめっきり少なくなったのは寂しい。私の街にも、お気に入りの古書店があった。そこで上質の「鯰絵の1枚刷り」復刻集成版をかなりの安値で買い、いまも大切にしている。東大赤門近くにあった間口1間半ほどの小さな古書店も、すでに老齢だった店主が亡くなり店を閉めたようだ。そこではグリージンガー、クレペリン、クラフト・エビング、ピネルといった、精神医学史上の重要人物たちの原著を結構なお値段で買い、いまも保有している。天が金で塗られ背表紙も本革に金文字だったりする本は、さすがにマーカーで線をひくことはできないが、たまに開いて眺めるだけでも豊かな気持ちになる。フェティシュな悦楽、これは電子ジャーナルにはない本の喜びである。

思い出の一冊

『君たちはどう生きるか』

行政政策学類　小島　定

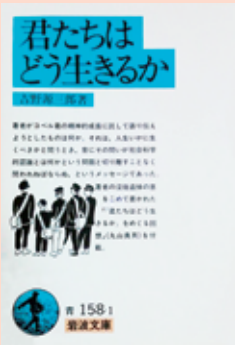
コペル君と最初に出会ったのはいつ頃のことであろうか。もう定かな記憶はない。たしか小学校の高学年か中学生のころ、国語の教科書の中ではなかったかと思うので、もう半世紀も前のことになる。今では岩波文庫に丸山眞男の解説（「『君たちはどう生きるか』をめぐる回想」。丸山の文章はいつもながら私の思考を掻き立てる）付きで収録されているから、古典の部類に入るのだろう。

なんといっても中学2年生コペル君の友人関係をめぐって生じた「苦い悔悟」は、同じ思春期の子供心を揺さぶるものがあった（「雪の日のできごと」）。誰しも子供時代にコペル君の経験に似たことが、一度や二度はあったのではあるまいか。と同時に、私はコペル君には、科学＝学問に通じた「おじさん」という強い味方、人生についての賢い助言者が身近にいたことをうらやましく思ったことが記憶の底にかすかに残っている。

東京の上流階級のコペル君は、北見君や大ブルジョアの水谷君とともに、下町の豆腐屋の息子浦川君という親密な友人をもっていて、「勇気」がないばかりに、彼らの間に結ばれた固い友情の「盟約」を破ってしまって、深い「悔悟」に陥り、おじさんの「助言」を得てコペル君が立ち直っていく、ある意味では心温まる話である。私自身は田舎出身で、どちらかといえば浦川君の階級に属するわけで、コペル君や知識階級への羨望もあったことは疑いえない。

いま本書全体を読めば、人としての生き方＝倫理の問題のみならず「倫理」と「科学的認識」とが切り離しえない関係にあるというのが基本テーマになっていることはよくわかる。また今自分自身を振り返ってみれば、私の学問への内的モチーフや、私の学問の〈精神〉（仮にそういうものがあるとすればの話だが）にも通ずるものがあるように思う。その意味では私の「思い出の一冊」にあげてもよさそうに思うのである。

コペル君は深く私の記憶にこびり付いたようで、その後も本書を何度か読んだ。いま私の書庫には、新潮社単行本（初版1969年、戦後改訂のポプラ社版が底本）の第21刷（1981年）がある。これは、中学生になった私の子供たちに贈ったもので、いま彼らは大学を卒業して、実家に送り寄こした「余計な身の回り品」のなかの一つなのである。50年代に「少国民」だった私の心に点じた「想い」はどうも我が子には伝わらなかったようだ。



『君たちはどう生きるか』

吉野源三郎著

(1)新潮社	1937. 8	『日本少国民文庫』5
(2)新潮社	1956. 6	『新編・日本少国民文庫』6
(3)ポプラ社	1967. 4	『吉野源三郎全集』1 請求記号：913.8/Y92j/1-1
(4)新潮社	1969.12	請求記号：913.8/Y92K
(5)岩波書店	1982.11	『岩波文庫』青(33)-158-1 請求記号：159/Y92K

＊写真左より(4)(5)

大学紛争後、思い直して学問を一からはじめて、いま定年間近になった。「ウェーバー」から始めたが、方向性を見失い、ロシア思想史に転身して、やっと「ロシアとウェーバー」という自分なりのテーマを見出したとき、すでに齢60に達しようとしていた。30過ぎてからロシアに転じたとき、念願のモスクワ留学でチェルノブイリ原発事故に遭遇し（1986年）、いま定年間際でフクシマ原発事故を体験することになった。そこに何か「運命」のようなものを感じながら、最近は、私の学問的関心は開国以来の近代日本の思想史に回帰している。危機にありながら、政治も人々も何ともちぐはぐな日本社会に「液状化現象」を感じ取るのは私だけであろうか。そんななかで再び本書に向き合う機会があった。私の生まれた環境では縁遠かった学問への憧憬と誘惑に火を点じたのは、はるか昔のこの「コペル君」との出会いであったかもしれない。

（2011年9月16日記）

海外の図書館事情～中国国家図書館～

行政政策学類　菊地　芳朗

私は、2010年4月から約1年間、中国の北京市で在外研究をおこなった。ここでは、その間に利用した中国国家図書館について紹介したい。ただし、私が利用したのは同館の蔵書やサービスのごくごく一部にすぎず、この点をあらかじめお断りしておきたい。

中国国家図書館は北京市中心部からやや北西の海淀区にあり、付近には北京動物園や“中国のシリコンバレー”として著名な中関村がある。目前に地下鉄4号線の「国家図書館駅」が設置され、利便性や周囲の環境は非常によい。私が利用したのはやや古めかしい建物（現南区）だったが、帰国後に新館（現北区）が本格オープンし、現在はそちらがメインの施設となっているようだ。

私が同館を利用したのは、論文執筆に参照する日本書が急に必要になり、それが同館に所蔵されていることをホームページで知ったためだった。同館に赴き、紆余曲折を経たのち利用者カード（读者卡）が即日交付され、それによって各種サービスを受けられることになった。必要な書類はパスポートのみで、費用は無料だった。なお、カードの交付手続きの際にデジタルカメラで顔写真が撮られたのだが、その後の手続きのたび職員がパソコン画面と私の顔を見くらべながら本人確認をすることになり、これには毎回複雑な思いをした。

中国国家図書館のサービスは日本の国立国会図書館に似ており、一部の中国書をのぞいて基本的に館外貸し出しは受けられず、閲覧とコピーサービスが中心となっている。講演会や展示会などもおこなわれているようだが、私は参加したことはなかった。閉架の図書を閲覧しようとする場合には、申請書を提出し、30分ほど待つと電光掲示板に受付番号が表示され、カウンターでカードを提示して該当書を受け取る（その際、パソコン画面で本人確認される）。

必要な部分をコピーしたい場合、閲覧室に付属しているコピーカウンターに申請用紙を書いて持っていくと、ただちに係員がコピーしてくれた（部屋によってはセルフコピーもあったが私は利用しなかった）。料金は1枚3角（約5円）と割安で（その後、大幅に値下げされたようである）、その場で現金で支払い、特に枚数制限はなかった。係員の仕事は早かったが、そのぶんかなり荒っぽく、本は大丈夫かと心配になった。

同館には日本の書籍が開架で閲覧できる「日本出版物文庫閲覧室」があり、ホームページによると収蔵数は100万冊以上と非常に充実している（他のアジア各国の書籍も含む）。この数は、同館の外国書の中で最多で、また外国書の配架・閲覧室が単独で設けられている国は日本だけであり、同館の力の入れようがうかがわれる。ちなみに、2010年に小出版社から刊行した拙著が同館に入っていることを最近知り、そのようなマイナーな専門書までを対象とする同館の収集方針を直接肌で感じることになった。

このように、同館は北京に住む日本人・日本専門研究者にとって実にありがたい施設であり、短い期間ではあったが、大いに恩恵にあずかることができた。3月11日に発生した東日本大震災によりやや日程を早めて帰国せざるをえないことになり、最後にもう一度ゆっくり同館を訪れることができなかったのを残念に思っている。

中国国家図書館　利用者カード

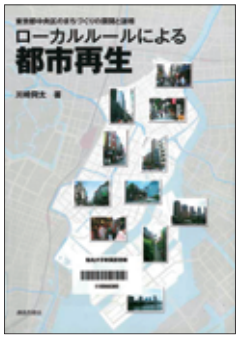
中国国家図書館　南区

福島大学附属図書館研修会開催報告
「変わりゆく大学図書館－その役割と求められる大学図書館像－」 学術情報課

平成23年3月9日（水）附属図書館視聴覚室にて、附属図書館主催の研修会が開催され、学内関係者（附属図書館長、附属図書館運営委員、附属図書館職員、事務協議会メンバー、関係部署職員）22名が参加した。

研修会は、学術情報基盤に造詣の深い信州大学附属図書館の郷原正好 副館長を講師として招き、「変わりゆく大学図書館－その役割と求められる大学図書館像－」（信州大学附属図書館の取り組みと課題）と題し、科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会が平成22年12月にまとめた「大学図書館の整備について（審議のまとめ）」の内容の解説と大学図書館が学術情報基盤の中核として存在意義を確立するための具体的な取組み事例として、信州大学の事例を紹介いただき、附属図書館職員だけでなく、附属図書館運営委員の教員などの学内関係者にとっても、今後の大学図書館のあり方について考えるよい機会となった。

学内教員著作寄贈図書



『ローカルルールによる都市再生：東京都中央区のまちづくりの展開と諸相』

鹿島出版会，2009
川崎興太著

私は、「都市計画・まちづくり」を専門としています。

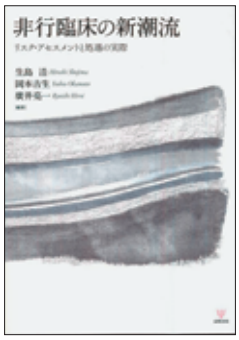
都市計画は、もともと“鳥から目線”で「都市」を整備する社会技術として誕生し発展してきました。

しかし、近年では、都市化社会から都市型社会への移行などを背景として、生活者にとって身近な「地区」を単位とする制度が充実しつつあり、全国各地において、これを使って都市空間を改善する取り組みのほか、多様なまちづくりルールを使って生活環境を豊かにする取り組みが見られます。

本書は、この地区を単位とする都市計画やまちづくりルールを「ローカルルール」と定義して、ローカルルールによる都市再生の可能性と限界性を実証的に明らかにするとともに、その運用実態を計画論的な観点から考察した上で、持続可能な都市再生に向けたいくつかの視点を示したものです。

研究の対象地は、日本の、あるいは、東京のど真ん中にある中央区ですが、福島の都市計画やまちづくり、さらには復興を進める上でも参考になるところもあるのかなと思っています。

生活者が少しでも豊かに暮らしていかれるように、見通せるだけの時間軸を持ちながら、具体の場所を計画・デザインすること、これが都市計画やまちづくりの原点だと思っています。



『非行臨床の新潮流：リスクアセスメントと処遇の実際』

金剛出版，2011.6
生島浩・岡本吉生・廣井亮一編著

非行臨床とは、非行少年の立ち直りを援助することを目的とするものです。法学・医学・社会学・教育学・社会福祉学など多くの学問的成果に拠りながらも、心理臨床的諸活動に軸足を置くことを特質としています。編著者は、法務省保護観察官歴20年余りの小職と家庭裁判所調査官であった大学教員であり、執筆者は、少年院や少年鑑別所を含めた非行臨床機関のスタッフ、学校教員、実務に精通した研究者を揃えました。非行臨床にとって致命的なリスクは、治安への体感不安を抱えた社会が再非行というリスクをゼロにしろと強要し、エラーを許さないシステム設計を求めている事態です。失敗事例、システムエラーがあることは言明し、データを公開して必要な説明を行い、臨床システムのバージョンアップという当然の責務を果たしていかなくてはなりません。本書は、それに応えるものであり、非行・犯罪問題はもとより、我々の喫緊の課題であるリスクマネジメントに関心を抱く多くの人に一読をお勧めします。

『子どもの心が見えてきた：学びの物語で保育は変わる：learning story』

ひとなる書房，2011.3
福島大学附属幼稚園（ほか）著

福大附属幼稚園が、福島大学の先生方とともに研究してきた成果を、大震災や原子力災害への対応のさなかの3月31日に「ひとなる書房」より発刊いたしました。

3年間「学びの連続性を考える ～学びの物語を通して～」という研究をしてきたものをまとめたものです。内容は、学長先生の「刊行に寄せて」から始まり、保育者や保護者の悩みや子どもを見る目の変化、子どもたちの成長の様子、大学の先生方の論文などがたくさんの写真とともに綴られたものです。

2010年の12月あたりから執筆を始め、大学の先生方とともにがんばりました。もうすぐ完成という時に、例の3.11地震が発生し、最終校正は宿泊していた職員が幼稚園で夜中に行いました。やっと整った原稿は、郵送もダメ、メールも動かず、FAXも使えない状態の中で、電話での長々としたやりとりで仕上げた次第でした。大学の先生方の熱意、幼稚園職員の根性、出版社の方の誠意で誕生したものです。ぜひ一度手に取っていただければと思います。

図書館新着情報

利用者サービスチーム

キャンパス内のパソコンから
図書館ホームページにアクセス！
http：//www.lib.fukushima-u.ac.jp/

●日経BP記事検索サービス

「日経ビジネス」「日経コンピュータ」など、日経BP社発行の雑誌について、最新情報から過去の記事までを検索し、本文を読むことができます。レポート作成はもちろん、就職活動の情報収集など幅広い用途で活用できます。

●医中誌Web［同時アクセス2台］

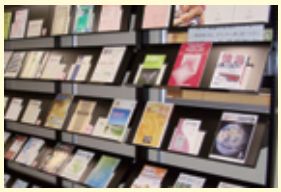
国内の医学・歯学・薬学・看護学及び関連分野の論文情報を検索できます。心理学や神経学を学ぶ・研究する方にオススメです。

●D1-law.com（ディーワン ロウコム）

法学を学ぶ・研究する方にオススメです。

- 現 行 法 規…法令や告示、それらの改正情報や廃止法令を収録。
- 判 例 体 系…約19万件の判例を収録。法律家による判例要旨なども登載。
- 法律判例文献情報…法律関連文献および判例の書誌情報を収録。

雑誌コーナー



学生用雑誌の棚を新しくしました(アルファベット順)。

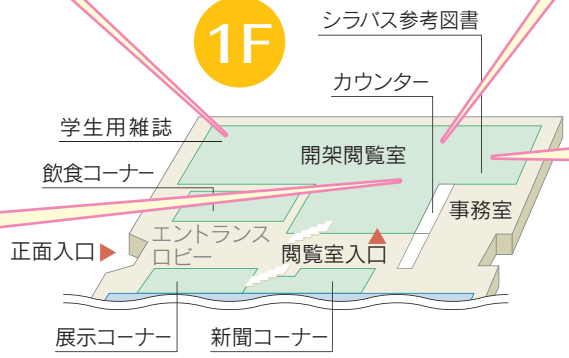
PCエリア

30台から20台になったため、1台あたりのスペースが広くなりました。

2011年5月より
開架閲覧室の
配置替えをしました!
皆様のご利用を
お待ちしています♪

学びのナビ

シラバス参考図書の近くに移動しました。ものの考え方や文章の書き方など学習に欠かせない本です。



学内刊行物

シラバス参考図書の裏側(岩波新書があった場所)へ移動し、岩波新書は2階の岩波文庫近くに移動しました。

東日本大震災被災後の開館状況

被災後は復旧作業及び新年度準備のため休館していましたが、5月9日の授業開始に伴い、4月25日から段階的に再開しました。

◆ 4月25日～5月6日　平日のみ13：00～16：00[土日祝休館]　◆5月9日～5月11日　9：00～17：00

◆【夜間20時まで開始】5月12日～5月31日　平日 9：00～20：00／土曜 12：30～17：00[日祝休館]

◆【土 曜 時 間 延 長】6月 1日～6月30日　平日 9：00～20：00／土曜 10：00～17：00[日祝休館]

◆【夜間21時まで開始】7月 1日～8月 7日　平日 9：00～21：00／土曜 10：00～17：00[日祝休館]

＊8月7日(日)オープンキャンパスのため10：00～17：00臨時開館

◆8月8日～9月30日　平日・土曜11：00～17：00[日祝休館]　＊日祝を除き長期休業による通常開館

目　次

●巻頭言「電子図書館への期待と「本」への愛着」……昼田源四郎(1)
●思い出の一冊：『君たちはどう生きるか』……小島　定(2)
●海外の図書館事情 ～中国国家図書館～ ……菊地　芳朗(3)
●福島大学附属図書館研修会開催報告
「変わりゆく大学図書館－その役割と求められる大学図書館像－」……学術情報課(4)
●学内教員著作寄贈図書の紹介
『ローカルルールによる都市再生：東京都中央区のまちづくりの展開と諸相』…川崎　興太(4)
『非行臨床の新潮流：リスク・アセスメントと処遇の実際』……生島　浩(5)
『子どもの心が見えてきた：学びの物語で保育は変わる：learning story』……福島大学附属幼稚園(5)
●図書館新着情報……利用者サービスチーム(5)